

# オキシモロンの考察：ある前衛的ジャンルについての試論

高橋 史朗\*

## Oxymoronic Insights: Science Fiction as a Radical Genre

Fumiaki TAKAHASHI\*

### Abstract

Though it has been long since SF was vaguely recognized as a literary category, the generic boundary of SF has not been clear yet. In his masterpiece, *Metamorphoses of Science Fiction*, Darko Suvin proposed a brilliant definition of SF in 1979. Since then, it has been in the center of controversy whether it is possible to differentiate it from other genres distinctively. In this brief paper, I would like to critically overlook some of the objections to Darko Suvin's definition, putting much stress on the radicality of SF, in order to reexamine whether SF can be a literary genre and how, in that case, its distinctive rhetorical features should be described.

**Keywords:** SF [Science Fiction], Darko Suvin, estrangement, cognition, genre, oxymoron

### I.

SF が文学の一つのジャンルとして認識されるようになったのは、決して新しいことではない。批評家は Science Fiction という言葉の派生をもって、ジャンルの創生と捉える場合があり、また、特定の作家、もしくは作品にその起源を求める場合もある。サイエンス・フィクションとしての SF に重きを置けば、ガーンズバック (Hugo Gernsback) 主催の pulp 雑誌——*Amazing Stories*——に SF の起源を見出そうとするであろう<sup>1</sup>、一方、例えば笠井潔は、ポオを SF 文学の創始者であるというが、これと同じような議論は、シェリー (Mary Shelly) や ウェルズ (H.G. Wells) を SF の生みの親であるとする批評家に共通する<sup>2</sup>。個々の批評家が SF というジャンルをどのように定義づけしているか (これこそこの試論の主題の一つとなるのだが) はともかく、SF に関わる多くの人にとつ

て、SF が文学ジャンルとして認識されるようになってから、すでに一世紀以上経過していることは確かであるといえるだろう。

ところが、SF というジャンルは常に揺れ動いている。ある批評家にとって、それは Science Fiction ではなく、Speculative Fiction あるいは Structural Fabulation であり、ある作家にとっては Space Fantasy かもしれない。現在 SF を SF としか表記しない批評家や作家が少なからずいるのは、このジャンルの流動的な性格を指し示していて興味深い。叙事詩や歴史劇といったジャンルの呼称がいく通りにも解釈されてしまうことを想像してみれば、これがどれほど奇妙なことなのかがわかるだろう。

このジャンルとしての揺れの根底に、歴史的な要因があることは容易に想像できる。その大きな流れについては、異孝之が巧みに紹介しているのだが、異によれば SF は、*Amazing Stories* 誌に紹介された作品に代表される科学・冒険 SF の時代から、社会科学的テーマの全盛期をジャンルのいわば初期の中心とし、「SF をモダニズム芸術史の部分集合」とするニュー・

---

平成 17 年 12 月 16 日受理

\* 感性デザイン学科・講師

ウェーヴの時代を経て、フェミニズム、サイバーパンク SF へと至る変遷をたどってきた<sup>3</sup>。上記の一節から推測できるように、この変遷は批評活動とも密接に関係していることは論を待たないが、ここではジャンルとしての SF が拡大的な方向に変容していることに注目したい。例えば、商業的な成功を得た最初の SF 作品群では、その虚構内世界を現実世界と峻別する要因となっているのが、自然科学のイノベーション・革命的な進歩・自然科学的な発見であり、それらはまさしくサイエンス・フィクションであった。このようないわゆるハード SF に属する作品は、その後、自然科学の占めていた地位に社会科学を当てはめるソフト SF が隆盛を極めたときにあっても、重要な作品の数が少なくなったとはいえ、継続的に描き続けられたのであり、どちらも SF の形態の一つとして理解されている。現在、SF という記号がもつニフィエの多様性は、このようなジャンルとしてのとどまることのない拡大的な性格に負っている。SF はつまり未だ閉じていないジャンルである。領域が定まらないジャンル。われわれはこの奇妙なオキシモロンを、ジャンルとしての SF 研究の出発点としなければならず、それ故、SF のジャンル論は必然的に弁証法的なのである。

このような観点からすると、SF の定義が必ずしも明確になっていないことは当然である。異は、「ひとたび SF を語り始めたら、SF とは何かをめぐる終わりなき論争に何らかの形で加担することになる」のは避けられないという<sup>4</sup>。SF をめぐる議論は、つまり、決定的な結論に至ることはないものであって、その点で実にポスト構造主義的な試みであるが、それは同時に、その試みすなわち、ジャンルの定義について考察し SF という膨大なテクスチャーに常に加わり続けることが、有意であること示唆している。SF というアプローチが常にそうであるように、終わりなき弁証法的論争になることは承知の上で、本小論では、これまでのところ最も影響力が大きく、かつ、現在もなお多くのテクスチャー

の重なる場所であるダルコ・スーヴィン (Darko Suvin) の SF の定義に関する考察を中心に、批評的な論争の一端に加わることにする。

## II.

1979 年、SF 批評の第一人者ダルコ・スーヴィンは、その主著 *Metamorphoses of Science Fiction* の中で、その後の研究のマイルストーンとなる SF の定義を明らかにした<sup>5</sup>。まず、スーヴィンは、SF の特質を帰納的にこう仮定する。

SF を定義する際考慮すべきは、「場」そして/あるいは「登場人物」からなる支配的装置に規定される虚構物語という面である。SF の場合「場」なり「登場人物」は、(1)「模倣的」もしくは「自然主義的」フィクション特有の経験的時間・場所・人物とは根本的に、あるいは少なくともかなり異なっているが、(2)しかし、にもかかわらず、作者の時代の認識上の規範…に照らして考えると、まったくありそうもないわけではない、とわかるしくみになっている (viii)。

その上で、SF のジャンル論上のパラメーターに、(1)の前提から「異化的/自然主義的」、(2)の前提から「認識的/非認識的」という二つの二項対立を導入し、SF を以下のように定義づける。「SF は、異化と認識の共存と相互作用を必要かつ十分条件とする文学ジャンルであり、その主たる形式上の表現的技法は、作家が経験できる環境に代わり得る想像的枠組みである」(7-8)。きわめてよく知られているこの定義に従い、スーヴィンは、この異化についての軸をもって「自然主義的文学」と SF を、認識の軸をもって「ファンタジー」と SF を差異化するのである。この異化と認識からなるパラダイムは、その構造主義的な規範性に関心が向くが、同時に「SF を科学とか未来、あるいはその他潜在的に限りがない諸主題のどれか一つの要素だけに還元す

べきではない」(viii)という観点に依っている。それ故、SFの「どれか一つの要素」について特権的な価値を認める批評にとって、これは批判的な言説となり得るし、かつまた、「限りがない」ことを前提としながらも、SFに規範的な枠組を与える以上、SF自由主義者にとっては制約的な批評として機能する<sup>6</sup>。それ故この定義はSFジャンル論にあって多くの反駁の対象となってきたのである。

スーヴィンの定義に対する第一の批判は——おそらく第二の批判に比してその重要性が低いものだが——その定義としての曖昧さを攻撃するものである。例えば、カール・フリードマン（Carl Freedman）にとって、スーヴィンの定義の根幹を成すSFの認識異化作用[cognitive estrangement]は、あまりにもSFの定義を錯綜させているのであって、定義としての厳密さを欠いている。フリードマンは、これによってSFの領域に含まれているとは考えにくい諸作品——例えばプレヒトの戯曲——が、SFと同列に扱われてしまうと主張する。確かに、スーヴィンの異化の概念はプレヒトに負っている。その上、「プレヒトにとって史的唯物論は認識的であるばかりでなく科学的である」のだから、認識異化作用を作品の主要な効果とするのであれば、プレヒトの戯曲はSFであるとしなければならないという懸念を、フリードマンは表明しているのである<sup>7</sup>。

しかしながら、いわば定義が広義に過ぎるといふこのような観点からの批判は、第一に、ジャンル論自体の弁証法的性格から反証を受ける。SFというジャンルが弁証法的に定められるというとき、SFのもつ弁証法的性格に加えて、われわれはジャンル論の弁証法を常に考慮に入れなければならない。例えば、ゲイリー・ソール・モアソン（Gary Saul Morson）は、文学ジャンルは種々のテキストとそれらを分類する批評家との間にある相関的活動によって生み出されるという<sup>8</sup>。このジャンル一般の弁証法的な性格は、ジャンル論を語る際に常に付きまとう。SF

に限らずあらゆるジャンルは、社会的存在なのであって、それ故、スーヴィンは、「文学ジャンルは、形而上の実体としてではなく社会的美学の実体として存在する」(16)というのである。

加えて、定義に用いられる命題はすでに社会的な用語であるということに、われわれは常に注意すべきである。先に、認識は「作者の時代の認識上の規範」から導き出されるパラメーターであることは述べた。これが実に社会的な表現であることは、論を待たないであろう。また一方、異化についてスーヴィンはこう述べている。

もし、人間の感覚と常識から一步も踏み出ることなく、経験的世界の表層やうわべを忠実に複製することで、人間と人間、人間と環境の関係を解明しようとするフィクションがあるとすれば、私は、それを「自然主義的フィクション」と呼ぶことにしよう。反対に、もし、そのような関係を、ラディカルに、あるいは決定的に異なる形式的準拠枠——つまり、たとえ話を語るための、常識[common sense]からはずれた、異質な時/空間や、異質な人物像——をこしらえることで、解明しようとするフィクションがあれば、私はそれを「異化的フィクション」と呼ぶことにしよう(18)。

異化とはつまり、「常識」からはずれることによって作り上げられるのであって、すなわち、社会的枠組を前提としている。従ってスーヴィンは「いかなる百科全集的事例も社会歴史的階級に特定の事柄」であって、「SFの中にきわめて有意な恒常的なものがあるとすれば、それは何であれ、具体的で社会的な読みの時点においてのみ理解」されるということを前提にしていると、言明しているのである<sup>9</sup>。特定の作品がSFの領域に含まれるか否かは、まさしく政治的な選択なのである。

確認しておこう。スーヴィンの定義に限らず、

あらゆるジャンルの定義は社会的である。従って、個々の定義を、それが社会的であるが故に否定的に解釈することはできない。フリードマンが指摘するように、ブレヒトの戯曲には、確かにSFに共通する要素が含まれている。しかし、そのような認識異化作用を有するすべての作品をSFに分類することはできないだろう。社会政治的に周辺の作品は、あらゆるジャンルに存在するのであって、それらを当該ジャンルの領域内に含めるか含めないかは、「社会的な読みの時点」で決定される<sup>10</sup>。この社会性はジャンル論の前提であり、従って、それ自体をもってジャンルの定義の妥当性を揺るがすことはできないのである。

### III.

スーヴィンの定義に対する第二の批判——この批判への反論はSFというジャンルの定義の根幹を考察する上で、より重要な役割を果たすだろう——は、第一の批判とまさしく好対照をなす。先の批判が厳密性に欠けることを指摘するのに対し、スーヴィンの定義は、狭義に過ぎるという反論である。例えば、ダミアン・ブロダリック (Damien Broderick) は、スーヴィンのSFジャンル論への貢献を高く評価しながらも、「私にすれば、スーヴィンの立場は…あまりにも狭いもので、サブライムなものへとSFが向かう方途をつかみ損ねてしまいかねない」と述べる<sup>11</sup>。また、フリードマンは——先の批判とは正反対のパーспекティブから——ブロダリックと同様にスーヴィンの定義を批判する。すなわち、パラメーターとしての認識はあまりに社会的で、科学的な正しさと密接に関係し過ぎているが故に、誤った仮定に基づく作品はSFとして分類できないと主張し、「最も厳格に考えれば、認識それ自体は、正しくSFを定義する本質にはなりえない」というのである<sup>12</sup>。

このような批判が重要なのは、それがSFというジャンルの無制限な拡大——批評家に

よっては、もちろんある程度の理論的制約が見られる場合もあるが——と密接に関わるからである。フリードマンの主張には、その端的な例が現れている。

一般的にサイエンス・フィクションが読まれている主要な文学的価値の多くは、ダンテやミルトンの努力にも当てはまる。それは、読者を自分が現在ある環境の限界の彼方へと連れ去ろうとすることであり、また、奇妙で慣れぬ畏怖の念さえ感じさせるような世界へと導くことである。その世界は、実際のところ未知と考えられているか、もしくは少なくともほぼ未知といえる地であるが、原則として知りえないわけではないという場所なのだ。こういう豊かで複雑ではあるけれども、根本のところではファンタスティックとはいえないオルタナティブな世界を生み出したという意味で、ダンテやミルトンはサイエンス・フィクションを書いたといえるのだ<sup>13</sup>。

このような主張は、極端なものになりがちであるが、事実フリードマンにとって、「あらゆるフィクションは、ある意味で、サイエンス・フィクション」なのである<sup>14</sup>。確かに、スーヴィンは、「認識の同族語としてサイエンスを選び出し、異化の同族語としてフィクション」(13)を選んでいるのだから、どれほど作品内での修辭的效果の表れが小さかったとしても、認識と異化が認められる作品をすべてSFというならば、あらゆる作品はSFになってしまう。

このようなSFの拡大的な解釈は、すでに触れたSFというジャンルの拡大的な歴史的傾向と共鳴する形で、広く一般に論じられている。SFは、ハードな科学的な何ものかを物語世界の異質性の根底に置いたところから始まり、その何ものかは、まず社会科学的な、やがては思想的な性格を有するに至った<sup>15</sup>。現代では、サイバーパンク、フェミニズム思想をも包摂するSFの範疇をより広範にとらえようとする試み

は、この歴史的性向に負うところが大きい。もちろん、そこにはスーヴィンに対する批判にあるような制約的な定義に対する理論的反駁の他に、パラ文学 [paraliterature] としての SF の位置付けをいわゆるハイ・リット [high lit.] へと近づけたいという、SF 批評家、SF 作家あるいは読者・ファンの渴望もあるだろう。「SF のぞくあらゆる文学は、結局のところ、適切性を欠く」というバラードの主張や、SF 作家が「人類にとってのモダンの良心を創造してきた」というスコールズとラブキンの提言に言及しながら、デヴィッド・マクヒュー (David McHugh) が端的に指摘するように、SF 文学のコンセプトは実に広範で「大仰なもの [the grandiose] となっている」のである<sup>16</sup>。

このような SF の定義の拡大は、最終的に SF の定義づけ自体を疑問に付すことになる。例えば、20 世紀後半に著わされた種々の SF のジャンル論を、広範に概観してマクヒューはこう述べる。

個人的な見解だが、SF に関わる批評の大半は、まさしく不毛なものとなっていると私は理解している。なぜならそれがしばしば、SF と主流文学 [mainstream literature] における『ファンタスティックなもの』あるいは『途方もないもの [the marvelous]』の概念との関係についての議論に、もしくはより洗練された形のユートピアとディストピアの弁別、限定されてしまうが故である<sup>17</sup>。

このような定義づけ自体についての疑念は、決して新しい議論ではなく、むしろ結論が出ないまま今日に至っている課題と捉えるべきだろう。後の考察でも重要な役割を果たす筒井康隆のテキストは、スーヴィンの定義以前の 1975 年に書かれたものだが、SF を制限しようとする定義に関わる反駁はマクヒューと主張を同じくし、むしろさらに明白な形で現れている<sup>18</sup>。筒井はやはり SF のジャンル論は「不毛」であり、そ

の理由を「SF を、数多い文学ジャンルのひとつとして捕らえようとしたことにこそ原因があった」と主張する<sup>19</sup>。つまり、ここ 30 年もの間、SF のジャンル論は、常に SF はジャンルではないという結論に近づき頓挫する、あるいは混迷に陥るということを繰り返しているのである。

ここに、われわれは、これまで概観してきた SF をジャンルとして位置づけようとする試みに対する最も念の入った反駁に近づいてきた。SF は「一見明確に『SF』という一ジャンルとして分類できるように見えながら、他のジャンルの小説に対していくらでも、表現形式的にも内容的にも同化することが可能であるというおかしな特質を持っている」という筒井の SF 観は、当然のことながら、驚くほどフリードマンの主張と共鳴している<sup>20</sup>。筒井の主張の背景には、「センス・オブ・ワンダー」や「文明批評」、「エンターテインメント」といった「SF 的と感じる漠然としたもの」が、すなわち SF の特質であると仮定されているが、これらは、フリードマンの反証するスーヴィンの理論で言うところの認識・異化と対応する「SF 文学のジャンルとしてのパラメーター」である。そして、それがあまねく文学一般の諸作品の中に見出されるとする前提とそこから導き出される結論は、用語の違いはあれ、フリードマンと筒井の時代を超えた共有点である。SF の特質が広く他の文学ジャンルにも認められるという筒井はこう述べている。

SF 界というのはむしろ文学の世界のほぼ完全な、ミニチュアともいえる世界を形成しているわけで、これだけどの文学ジャンルにも重なり合っていたのでは、その位置すべき場所がながい間わからなかったのも当然といえましょう<sup>21</sup>。

フリードマンと筒井、両者はまったくアプローチを異にしているけれども、二人の論説は、いわば SF をジャンルとして位置づけようとする

試みに対する30年もの間続いた反論の典型として、現れているのである。

このような論理的立場に立てば、必然的にジャンルとしてのSFを想定すること、換言すれば、SFを他のジャンルと弁別する方途は、閉ざされているかのように思われる。事実、筒井にとってSFはもはやジャンルではない。それは類型ではなく、「見方」なのである。

…「SF」ということばは、文学の一ジャンルを表現することばではなく、むしろものの見方ではないかと考えることができるのではないのでしょうか。つまり「SF」が文学の世界のどの場所にも一ジャンルとして特定の位置を占めることができなかったのは、「SF」が文学の世界すべてを「SF的手法」「SF的思考」で塗り潰してしまえるような立場にあったからです<sup>22</sup>。

SFにまつわる他の論争、それは、「SFにイデオロギーはある/ない」といった観点かもしれないし、「SFはあらゆる束縛から自由である/ない」といった主張かもしれないが、それらが、SFと他の文学ジャンルとの相違/一致を論じているのであれば、SFが境界を定めることなく拡大していく限り、これまでに論じてきたジャンル論と何ら変わることもない結論に至ることは容易に推察される。すなわち、拡大するSFの特質は、それを理論的に抽象化——換言すれば構造的にモデル化——しようとするほど、他の文学ジャンルが共有できるものに近づくのであり、従って、SFのジャンル論上の定義づけは不毛な努力であると主張されてきているのである。

一見したところ、このようなジャンル論——あるいは非ジャンル論——は、確かにSFを類型化することに対する強固な反発であり、SFというジャンルの否定に違いない。しかしながら、ここでとりわけ重要なのは、否定しようとしているその背後にある疑いようもなく肯定的

な姿勢である。この類型化の拒否は、SFを他のジャンルと差異化する特異点の記述によって成り立っていることに、われわれは気がつかなければならない。ここに挙げたジャンルとしてのSFを否定しようとする少数の議論から明らかになっているのは、その努力が同時に、常にSFの特質を考察した結果であり、SFを他のジャンルから弁別しようとする試みに一致しているということである。実際、筒井はそれでもなお「SFの特質」に言及している。彼が「超虚構性」と呼ぶその特質については後述するが、ジャンルではなく「ものの見方」であったにせよ、そこにあるのは、SFは他の文学作品が寄って立つ立場から弁別されるべきであるという歴史的観点であり、その観点こそSFのジャンル論のみならず、ジャンル一般が成立する社会性に他ならない。それ故、筒井のSF観に歩調をあわせるかのように、フリードマンの結論も「傾向」という表現を使いながら、結局ジャンルへと立ち返るのである。

ジャンルは分類ではなく、要素もしくは傾向というべきものだ。その傾向というのは、つまり、他の比較的自明なジャンル上の要素や傾向と組み合わされて、多かれ少なかれ程度の差こそあるものの、複雑に構成された全体性として理解されるべき文学テキストの中でアクティブであるような傾向のことである。換言すれば、テキストはある一つのジャンル上のカテゴリーにファイリングされるのではなく、むしろジャンルの傾向こそ、テキストの内部にあって何がしかの働きをするものだ<sup>23</sup>。

この一節が示しているのは、明らかに一度否定されたはずのジャンルとしてのSFである。しかし、このジャンル論は実に奇妙な論理に立脚している。つまり、他のジャンルに属する作品も共有する特質として、限りなく一般化されるSF的なものが、同時にSF自体の特異性を指し

示しているのである。「SF 的なもの」をもって SF を規定することはできないと仮定してみよう。それを認めるとしても、同時に他の文学ジャンルに「SF 的なもの」が見られること、その現象は常に SF 的なものであって、それを SF の特質だという同語反復的論理では、ジャンル論を否定できない。むしろ、われわれは積極的にこう認めるべきである。すなわち、SF のジャンル論は一般化され続ける特異性というオキシモロンで表されると。

#### IV.

われわれは、ここにジャンルの特異性への議論に回帰した。そして、この一般化される特異性もスーヴィンに回帰するのである。SF の特異性、それはやはり異化（といえるもの）なのである。他のジャンルに見られる「SF 的なもの」は、読むという行為の中でどのように働くのか。筒井の分析は、的確である。

では、SF の特質とは何でしょうか。あらゆる文学のジャンルに裏から照明をあて、それらのひとつひとつの特質をグロテスクなまでに浮き出させ、時にはそれらの価値さえ矮小化してしまい、それらが隠そうとする虚構性をネガティブに反転させてあばき出してしまうという効果を持つ、SF の特質とは何でしょうか。ぼくはこれを仮に「超虚構性」と名づけたのです<sup>24</sup>。

この筒井が述べている「超虚構性」は、まさしく異化に他ならない。このメタジャンル/メタフィクション的な異化作用は、オルタナティブな世界を提示することで、SF 読者の経験世界を異質なものにすといわば第一の異化——もちろん、それ自体第二の異化の効果も有する——とは異なり、あるジャンルの文学を読む、その経験を異質なものにす効果である。「文学一般に認められる SF の特質」というオキシモ

ロンを受け入れるならば、それはなお異化に他ならない。SF はかくして領域の自由——これもひとつのオキシモロンである——を手に入れた。異化というパラメーターをもって SF を構造的に弁別することは、可能であり、同時に不可能なのである。

さらに重要なのは、この事実は、SF が必然的にラディカルなジャンルであることを意味しているということだ。ジャンル論上、それは SF 自身をも含むあらゆる文学にとっての異端であり、論理の転倒、価値の逆転の契機となりうる。筒井は「純文学」、すなわち SF とは分類されない文学と SF との関係——これはもちろんメタジャンルの関係である——を、「超虚構性」の観点からこう整理する。すなわち、純文学の小説の中には虚構性を誇張し、「小説でありながら小説への反省を促す効果」を持った前衛的な小説がある。これらは SF と非常に似た性質を有する作品であり、SF が「前衛的」になるにつれ、これらの作品の「単なるにせものに陥る」可能性はある。しかし、

シュール・リアリズムやアンチ・ロマン系統の前衛的な小説が存在する部分は、超虚構性を持つ SF の立場からはさらにその裏側へまわりこまなければならない。相手が二重の虚構性を持つなら SF は三重の虚構性を持たなければならない筈なのです<sup>25</sup>。

この「小説への反省を促す効果」は、スーヴィンの用語を用いて言い換えれば、異化に他ならず、その異化効果が SF を前衛たらしめている。まさしく、究極的な SF の特質は異化にあるのであって、それがあがるが故に、SF はラディカルであり続けるのである。

スーヴィンの定義に対する反駁から、われわれは異化の意義を再確認したのだが、さらにもうひとつの遠近法の中心、認識について、異化と同様にその機能のメタジャンル性を見出せないだろうか。この検証のため、スーヴィンの錯

綜した議論から、認識についての下位区分を鮮明化してみよう。スーヴィンのSF理論では、認識というパラメーターは、第一に「SFを神話のみならず、昔話、おとぎ話、そしてファンタジーから区別する」(8)のために導入されている。神話からファンタジーに至る一連の空想的な物語群について、スーヴィンは詳細に検討するが、それらは認識的でないが故に、「非自然主義的・形而上的文学ジャンル」(11)と位置づけられる。言い換えれば、SFは認識的であるが故に、自然主義的であり非形而上的なのであるから、少なくとも、認識はSFの虚構性を薄め、経験的な現実性を高めることを、第一の機能としているといえるだろう。

スーヴィンにおいてSF特有の美的体験は、この認識の第一の機能と異化が密接に関係づけられることによって構成されている。そのため、優れたSF作品に認められるべき認識の効果、あるいは、第二の機能は極めて錯綜したものとなるが、異化との協同という点ではさらなる重要性を有している。スーヴィンにおいて「SFが他のジャンルと区別されるのは、認識的論理に裏付けられた虚構的ノーフム [novum] が、物語において支配的もしくは優位を占めている点」にある(63)。「認識論上の革新」であるこのノーフムは、作者や内包された読者 [implied reader] の経験的現実からの逸脱であるから、彼自身認めているように、極めて広義に解釈できる。詩的なメタファーもある意味でノーフムであり、自然主義的な小説などにおける新しい洞察もノーフムである。それでもなお、彼は「認識的——たいていの場合、科学的でもある——要素はSFに求められる美的特性を、SF独自の快感を、測定する尺度になる」(15)と切り切るのである。

彼がそう述べる理由は、異化が有するラディカリティのSF特有な源として、ノーフムを挙げるからである。認識とノーフムは、経験的な知の体系から妥当性を借用しつつ、同時に経験的な世界の妥当性を疑う機会を提供するのであ

る。スーヴィンはこう述べている。

虚構の出来事を常に構成するのは、作者の文化規範に束縛される意味の場の侵犯である。ノーフムはその境界を超える運動を強化し過激化する。「自然主義的」小説では、境界侵犯は類像的 [iconic] で同型的 [isomorphic] だ。この場合、文化規範の侵犯は、文化規範の侵犯でしかない…。ところがSFでは、すくなくともその中でも決定的な意味を持つ出来事においては、境界侵犯は類像的ではなく異形的 [allomorphic] だ。この場合、文化規範の侵犯は、単なる文化的・存在論的規範の侵犯以上のものによって表現される。もしくは、キャラクターあるいは行為者 [agents] が時間あるいは/および空間的に位置をずらされることやその人物の周囲で現実自体が変化することが原因となる存在の変化によって表現される。斬新さ [novelty] がSF物語特有の存在論的 [ontolytic] 効果に資するものであるというのが、思いつく限りの適切な表現だろう(70-1)。

「自然主義的」小説は、経験的な文化規範を超えること、その行為自体が経験的に規定されるのに対し、ノーフムが「支配的もしくは優位を占めている」物語であるSFにおいては、文化規範自体が認識的な妥当性の仮面をかぶってずらされているが故に、文化規範と文化規範を超えることの双方が、異なる意味に捉えられる——異化の対象となる——のである。

異化と認識という二つのパラメーターから出発したわれわれは、スーヴィンにおいて、認識とノーフムは、ジャンル論上本質的に排他的であるが、同時に、SFが自然主義と協同する契機となっていることに注目しなければならないだろう。異化効果は、SF作品の内部において読むという行為の中で発現する場合とSFではない自然主義的な作品の中でSF的な要素として発現する場合の双方において、ジャンル論上SF



を拡大する方向に働く。しかし、認識とノーヴムは、自然主義との共有点を確保しつつ、同時にそれとの弁別に資するものである。つまり、スーヴィンの認識の定義上の位置付けには、相反する方向のベクトルが共存しているのである。

当然のことながら、優れた SF を読むという経験には、異化と認識という異なるスペクトルが見出せる。しかし、この奇妙な分裂は、決して SF の文学的価値をおとしめる方向に作用するのではない。むしろ、それらが複雑に相互干渉することによって、換言すれば、弁証法的に作用することによって、SF に特有の美的価値を高めているのである。スーヴィンは、経験的に保証された現実効果を持つ自然主義的小説をテーゼ、それを欠くファンタジーなどの超自然的ジャンルをアンチテーゼ、現実効果を革新的認識で保証する SF をジンテーゼとする弁証法を提案している。これは、ジャンル論でもあり、同時に SF の芸術的経験を達成するための読みのプロセスでもあるのだ(80-1)。事実、スーヴィンは、このジャンル論のコンテクストにおいて、「どんな SF 物語でも、その本質をなす固有のノーヴムの性格を判断するときには、それがたとえ架空のものであっても、首尾一貫した世俗的歴史的諸関係について、どれほど新しい洞察をもたらしうるかを考慮しなければならない」という(81)。つまり、異化と認識・ノーヴムは、SF の内部にあって美的経験を作り上げるため協同しつつ、一方で、ジャンル論上 SF を自然主義的小説やファンタジーから弁別する/しないために協同しているのである。

ここでわれわれは再度、SF の奇妙な性格に気がつかされる。認識とノーヴムは、特にそれが科学と密接に結びつく場合がそうだが、確かに SF の範疇をより厳格に定める方向に働いている。従って、前述の通り、SF の範疇を広げる原動力となる異化とは、明らかにベクトルの向きを異にしている。一方、認識は同時に、異化とともにあって、ともにあるが故に、SF 特有の

美的経験を構成するのである。SF は超経験主義的かつ異化的であるという点で反自然主義的でありながら、認識的であるから自然主義的なのである。つまり、認識についての考察の結論は、SF は「反自然主義的自然主義文学」あるいは「自然主義的反自然主義文学」というオキシモロンとして理解されなければならないのである。

SF とはオキシモロンであること、これが SF を読むこと、SF の領域を定めることの前提であり、結論である。異化が導くジャンルとしての性格、認識からたどる異化効果の発現、この両者ともに、SF が相反する意味作用の只中にいることを指し示している。こうして考察をすすめると、スーヴィンが「認識の同族語としてサイエンスを選び出し、異化の同族語としてフィクション」を選んだということは極めて示唆的である。「だから実に、その根本において、SF とは念の入ったオキシモロン」なのである(viii)。

もう一つ、このジャンルに関わる、おそらくはより重要な結論がある。それは、優れた SF は常にラディカルであるということである。異化に関わる SF のジャンル論の結論、それは、SF が常に文学的価値の転倒、逆転に関わり続けなければならないということであった。また、認識に関わる結論、こちらについては、スーヴィンを引用するのが近道だろう。彼はこう述べている。「…ノーヴムの必然的な相関物は、選択できる別の現実であり、しかもこの別の現実の中には、物語によって解き明かされる異質の人間関係や社会的文化的規範に対応する *異質の歴史的時間が存在する*」(71)。そして、その歴史的時間の存在が経験的現実を異化すること、すなわち、SF の提示する読みの経験の目的をこう説明しているのである。

運命中心の集団主義と人間中心の個人主義。

この両者の対立を止揚する弁証法の第三項こそ、私たちの時代の *実践* [praxis] とエピス

テーマーにもとづく真に現代的な文学，ならびにSF，が目指すものだろう。人間の制度的・想像的産物——国家，企業，宗教，戦争など——が，いとも簡単に，私たちひとりひとりを支配する運命になりうることを，私たちはすでに学んできたはずだ。今，20世紀にあって，悲劇は再び起こりうる状況になっている。…今ある障害は個人を超越してはいるが，決してそれは人知を超えたものではない。古臭い運命論の大げさな衣を着てはいるけれども，同じ目的のために結集した人々の力によって乗り越えられるのだ。人類たることこそ個々の人の歴史的運命である。この歴史的三者関係のジンテーゼは，人間中心の集団主義である（74-5）。

つまり，現在（少なくとも資本主義の抑圧から解放されるまで）のSFとは，社会構造の寄って立つ論理に対する対抗戦略であり，それ故，ラディカリティとはSFが真に現代的な文学として立脚するための生命線なのである。

SFは，物語の世界全体——あるいは少なくともその世界の特に重要な局面——の変化を描くが故に，読者とノーヴムの革新がもたらす未知なる物/者との間に「SFの本質的緊張関係」が生じ，それが経験的規範の異化をもたらすとスーヴィンは主張する（64）。これがSFのラディカリティと密接に関係しているのは明らかだ。しかし，もしそうであるとしたならば，真に優れたSFとは，その経験社会の全体性に対する異化の契機となるものでなければならないだろう。社会全体をすべからず批判する契機としての特別なSF。スーヴィンは，それをSFのサブジャンルと呼んでいる。しかし，そのサブジャンルは，SFの特質をもっともよく反映するSFのピークの一つであるはずではないか。それを書き，読むことにラディカルな意味を込めて，私はそれをジャンルと呼ぶ。その名前は，ユートピアである。

## 注

- 1 ガーンズバックが“scientifiction”なる表現を用いたのがSFの語源であるという推論は，多くの研究者が支持するところである。一例として，Damien Broderick, *Reading by Starlight* (London and New York: Routledge, 1995), p. 7を参照。
- 2 笠井 潔，『機械じかけの夢 私的SF作家論』（ちくま学芸文庫，1999年），p. 50。このような立場をとる代表的な批評家には，ロバート・スコールズ（Robert Scholes）とエリック・ラブキン（Eric S. Rabkin）が挙げられる。『SF その歴史とヴィジョン』（TBSブリタニカ，1980年）ではシェリーを創始者とする文学史感が展開される。
- 3 巽 孝之編，『日本SF論争史』（勁草書房，2000年），pp. 4-6。巽がまとめているSFの歴史的変遷には，いわば古典のSF作品——例えばスイフト——が含まれていないが，ここでは，いわば狭義のSFの変遷を指摘しておきたい。すなわち，SFが広く商業的に成功し，一定以上の読者層を獲得した20世紀以降の変化である。
- 4 巽，p. 1.
- 5 Darko Suvin, *Metamorphoses of Science Fiction: On the Politics and History of a Literary Genre* (New Heaven: Yale UP, 1979). 以下同書からの引用は，ページ数のみを記す。また，本稿において同書からの引用文中にある斜字体による強調は，すべて原文のままである。なお，引用に際しては同書の邦訳版の『SFの変容』，大橋洋一訳（国文社，1991年）を使用した，一部文脈等の都合上訳文を改変していることを付記する。
- 6 スーヴィンは「異化をめざす姿勢…は，SFにおいてもいまやジャンルの形式的枠組にまで成長した」と主張している。（7）
- 7 Carl Freedman, *Critical Theory and Science Fiction* (Hanover and London: Wesleyan UP, 2000), p. 19.
- 8 Gary Saul Morson, *The Boundaries of Genre: Dostoevsky's Diary of a Writer and the Traditions of Literary Utopia* (Austin: University of Texas Press, 1981), intro., p. viii.
- 9 Darko Suvin, “Novum Is as Novum Does.” *Science Fiction, Critical Frontiers*, eds., Karen Sayer and John Moore, (London: Macmillan, 2000) p. 3.
- 10 より厳密には，その作品があるジャンルに位置づけられることを是とするか非とするか自体も，ジャンル論という学問が社会的である以上，

- 社会的に決定されるというべきである。もしそうでなければ、どれほど緩やかな定義づけをしても、ジャンルは決定論を要求することになる。
- 11 Broderick, p. 33.
  - 12 Freedman, p. 18. フリードマンは「認識」に代え、「認識効果 [cognitive effect]」を SF の定義の構成要素とすべきであると主張する。認識効果とは、すなわち、科学的に誤っていることが証明されているが、それでもなお SF の作品内世界を形作る動因になっている虚構的枠組みがもたらす、認識とほぼ同じように働く機能という意味である。しかし、この主張は、スーヴィンの理論に関する根本的な誤解がある。スーヴィンは、「マルクスやアインシュタイン以降の科学が知の集積体となったため、作者の属する時代における科学的方法の哲学的基盤に違反さえしなければ、どれほど空想的で新奇な学問でも、SF では科学的根拠の役割を果たせる」と述べているように、認識をもたらす虚構的枠組みが科学的に正しくなければならぬとは考えていない。
  - 13 *Ibid.*, p. 14.
  - 14 *Ibid.*, p. 16.
  - 15 ここで示唆されているのは、SF の物語世界が他の作品のそれと異なるものになっている動因、すなわち、スーヴィンの言い方を借りればノーヴムである。
  - 16 David McHugh, “‘Give Me Your Mirror-shades’: Science Fiction ‘Methodology’ Meets the Social and Organizational Sciences.” *Science Fiction and Organization*, eds., Warren Smith et al., (London and New York: Routledge, 2001), p. 17.
  - 17 *Ibid.*, p. 20.
  - 18 筒井康隆, 「現代 SF の特質とは」, 異, pp. 244-52. 筒井のいささかならず古い言説をことさらに取り上げるのは、異が「ポストモダン文学全般の動向と本能的に共振し、それに即した文学理論によって長く創作活動を続け」てしていると評する筒井の SF 文学理論の先見性の故であるが、加えて、それがフリードマン、プロダリックといった現代の批評家たちの SF 観と実に一致していることが理由である。ここ——およびこれに続く部分——で触れているように、筒井の SF 観は 30 年を経た今でもフリードマンの理論にその内容が酷似するほど斬新なままである。なお、スーヴィンの SF 理論の根幹を成す初期の論文——これは *Metamorphoses* にその内容が反映されている（*Metamorphoses*, xvii 参照）——の “On the Poetics of the Science Fiction Genre” は、1972 年に著わされており、厳密に言えば筒井の言説はスーヴィン以降といえるかもしれない。
  - 19 筒井, p. 244.
  - 20 *Ibid.*, p. 248.
  - 21 *Ibid.*, p. 247.
  - 22 *Ibid.*, p. 249-50.
  - 23 Freedman, p. 20.
  - 24 筒井, p. 250.
  - 25 *Ibid.*, p. 251.